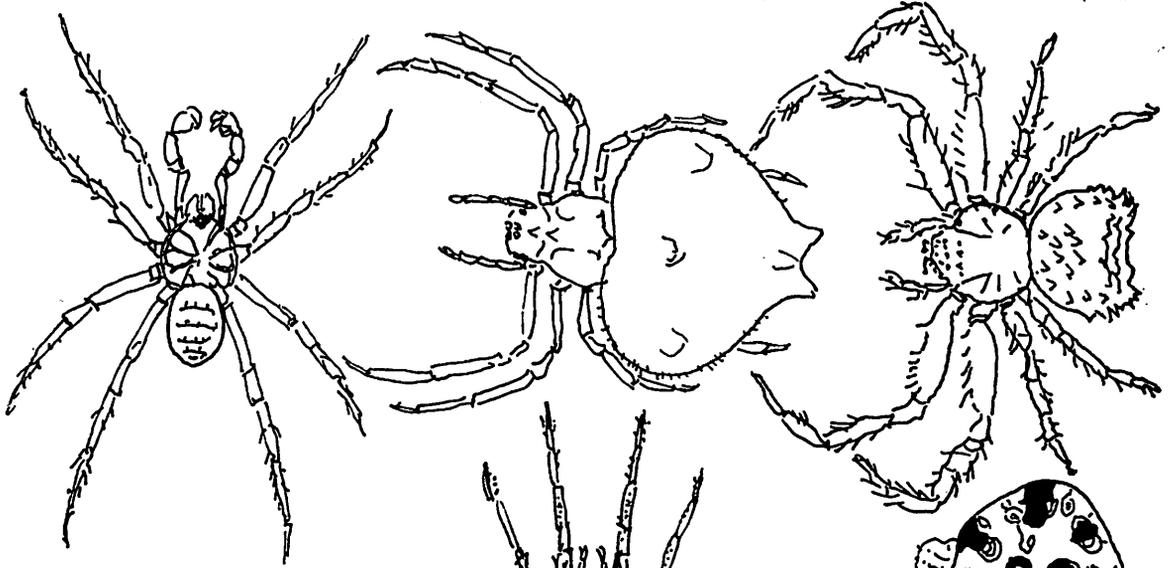


東京蜘蛛談話会誌

KISHIDAIA



No.26~28 (記念号I)



東京蜘蛛談話会 東京都日野市豊田1.896 萱嶋泉方(TEL.0425-81-7128)

東京蜘蛛談話会の5周年を迎えて

萱 嶋 泉

若い人も好きの人達が集まつて東京蜘蛛談話会をつくつて早や5年、その機関誌として、岸田久吉先生を記念するべく、KISHIDAIA と云う誌名で発行してから3年弱の月日を経過した。毎月1回の発行となると原稿が仲々集らないので係の者は苦労するだろうと知りつつ、あえて月刊とした。ところが1年を経過しない中に、この苦しみは係の者を襲つた。それで東京在住の若い人々に、割当制で原稿を依頼し、なんとか発行することが出来た。2年目になると地方の会員の方へも依頼した。八木沼先生投稿と言うありがたいこともあり、係の大河内氏をはじめ松本、新海の両君のなみなみならぬ協力の御蔭で合併号などで、その責任を形ばかりははたした。

さあ3年目である。奮起せねばならない。会員諸氏が勉強していないから原稿が集らないのではない。皆盛んに研究している。その成果がすばらしくあがつていることも知つている。それは時おり拙宅に集まるクモ仲間との話し合いでよく知ることが出来るのである。若い人々の中には卒業し職業に就いたばかりで、その職に熱中せざるを得ぬものも多くいるし、他は学生ですばらしく真面目な方ばかり、自分の専門の学問に生きるべく猛勉強をしている。だから原稿を書く余裕がないのである。だがしかしKISHIDAIAは自分達の機関誌である。自分達が盛りあげねば、誰れがこのKISHIDAIAを育ててくれるであろうか。このままでは岸田先生に誠にあいすまぬことになる。私を含めて今大いに反省すべき時にいたつていと思う。くもに関する研究雑誌は誠に少い。またその沢山は出来ないと。だからこのKISHIDAIAを育そあげることは、くも学的发展に大いに貢献することになる。発刊の言葉で述べたように、決してむづかしい研究を要求しているのではない。メモ程度で結構である。私共はこのKISHIDAIAをくもの学術誌、新種発表の場などにする気持は毛頭ない。あくまでも会員相互のくもに関する研究のお手伝いの雑誌である。初心者にかかしてくもを理解してもらえるかを教える雑誌である。さらにこの機関誌を通して親睦がはかれば幸であると願つている。

それで会員であるならば、誰れがどんなことでも発表が出来るし、別刷を要求して預けるならば実費で刷つてあげている。ほんとうに楽しい機関誌にするのが目的であるから、地方の方々もどしどしと投稿して頂きたい。未知の世界の多いくもであれば、どんなささいな観察でも貴重な文献であり、後世に記録さるべきことであると思う。今の段階では私共はこのような小さな記録を無駄にせず、こつこつと集録することが大切であり、是非ともせねばならぬことがらである。われわれ総て素人であつて、決して専門家ではない。だから談話会のメンバーの中に専門家づらしているものは誰れ1人していない。これがこの会の特徴であり、益々発展するゆえんでもある。KISHIDAIAはそれで、素人が作りあげる雑誌と言うことが出来る。KISHIDAIAを読めば、くもに興味が自然にわいて来て、どうしても研究せざるを得なくなる心境に、多くの人を誘ひこむことが出来なければ、目的を達したとは言えぬ。その為めには現在の会員諸氏もつと自覚してほしい。自覚して頂ければ、必ずやすばらしい機関誌が生れ、くもを愛する人々が増加してくれると思うのである。このKISHIDAIAで育てられ、学術的な論文が書けるようになれば、Atypusなり東亜蜘蛛学会誌なりに投稿すればよいのである。くも学の将来は全く明るいと思ふ。それはぞくぞくと若い人がくもを研究してくれるようになって来たからで、誠に有難いことだと考へている。これは日本だけの現象であるが、他の国にもこのようなことが起つているか私は知りたのである。岸田先生は3年前に他界されたが、今なおKISHIDAIAを通して我々をくもの世界に誘つてくれるのである。3周年を迎えるに當つて今年こそは立派な機関誌に育てあげねばと、心から思ふのである。このことがKISHIDAIAと云う

KISHIDAIA, No. 26-28, 1971, Nov.

誌名にしたこの談話会の責任であるのである。

静岡県産の洞穴性蜘蛛について Cave spiders from Sizuoka prefecture

小林久俊

静岡県西部には小規模ながらいくつかの鐘乳洞がみられる。これらの洞穴については、上野俊一、久米忠夫両氏により一部調査が行われ、この結果は八木沼健夫氏の「洞穴のクモ」(1962)にみられ、これには、岩水寺洞産のホラヒメグモ(*Nesticus brevipes*:注記録では*N. akiyosiensis*となつている)および、堀谷洞産のコアシダカグモの2種が記録されている。また、久米忠夫(1963)の目録中にも上記の2種がみられる。しかし、その後、これらの洞穴については、十分調査が行われていなかつた。

筆者は1969年から、岩水寺鐘乳洞をはじめとして、滝沢、堀谷、小堀谷の洞穴について採集調査を行つてきたので一応これまでに知り得た種について若干の生態的知見を加え報告する。なお種名未決定の種については今後明らかにしていきたいと思う。また日頃から御指導頂き、文献等お世話になつた八木沼健夫博士に感謝します。

I 調査洞穴

これまでに調査採集を行つてきた洞穴は次の4洞穴である。

- ① 浜松市滝沢洞穴
- ② 浜北市岩水寺洞穴
- ③ 堀谷洞穴
- ④ 小堀谷洞穴

各洞穴はいずれも鐘乳洞で、長さ50m程度かそれ以下の小規模のものである。

これらの洞穴のうち岩水寺洞穴では、内部に地下水の流れる「池」がみられ、又小堀谷洞穴においては奥が開口し筒状になつている。

堀谷、小堀谷洞穴では入口が他の2洞穴より大きく、コウモリの生息が認められたが、各洞とも生物相はかなり豊富であると思われる。

なお洞内温度は、岩水寺洞で18℃、小堀谷洞で24℃と各洞穴の差があつた。

II クモ相について

現在までの調査では、4洞穴で11科16種が採集されている。これらのクモのうち最も個体数が多い種類はコホラヒメグモで岩水寺洞穴では最も普通にみられる。又他の3洞穴では、ヤミグモの一種(*Archphantes* sp.)がいずれも個体数が多く、滝沢洞穴では、9~11月にかけて最も仮定的にみられた。その他、洞口付近では、ウズグモ、コアシダカグモなどがいずれの洞穴でもかなり普通にみられた。

真洞穴性あるいは好洞性と思われる種は今のところ、岩水寺洞産のマシラグモの一種、および、

Cybaeus sp. があげられる。

目 録

〔各洞穴については種名の後にG: (Gansuiji cave), T: (Takisawa cave), H: (Horiya cave), K: (Koboriya cave)の記号で示した〕

1. *Antrodiaetus roretzi* (L.Koch) カネコトタデグモ G, H

入口付近より洞穴の最も奥の暗黒の場所にまで分布している。特に洞穴の粘土質の部分にかなり集中的に分布している。住居の型態等は特に野外のものと差はなく、色彩等も特に変化はみられない。両開戸を持つ管状住居を傾斜地の土中に掘っているが、深いものは少ないようであつた。

2. *Lathys punctosparsa* Oi ナシジカレハグモ H

1971年10月に♂♀各1個体の成体を採集した。洞の中央部の壁面の凹地にタナグモ科のものにやや類似した網をはつていた。色彩は野外のものより全体に淡い。

3. *Uloborus varians* Boes. et Str. ウズグモ T, G, H, K

4. *Falcileptoneta striata* (Oi) ヨコフマシラグモ H

洞内の暗所にて、壁面に複雑なシート網をはつていた♂の成体を1個体採集した。

5. *Falcileptoneta* sp. G

現在まで岩水寺洞穴でのみ採集されている。洞穴内の最深部に生息するが、個体数は極めて少ない。岩の間隙等に一重のシート網をはるが、八重のものもかなりみかける。

体色は白色で、全体に洞穴種らしく、繊細な感じをうける。眼は存在するが極めて小型である。本科のものは、付近の野外でも採集されるが、本種は未だ野外では採集されていない。(なお堀谷洞穴においても眼が小型で本種と類似するマシラグモの幼生を採集しているが同一種であるかは不明)

6. *Theridion tepidariorum* (O. Koch) オオヒメグモ H

7. *Nesticus brevipes* Yaginuma コホラヒメグモ T, G, K

岩水寺洞穴では最も個体数が多く、洞穴全体に見られる。入口付近のもの、内部のものでは、あまり差がなく、色彩、斑紋がやや変化する程度である。網はヒメグモ状の網をはることは他の本属と同じで、8~9月頃に成体となり産卵するが、♀は冬期でも成体がみられる。卵のうは10月頃までみられ、白色、球型で1コの卵数は20~30個と思われる。(岩水寺で採集した2つの卵のうは、それぞれ23、と32個で、小堀谷のものが32個であつた。)

8. *Archphantes tamaensis* (Oi) タマヤミグモ T

滝沢洞穴での採集標本より♀1が発見されたのみである。

9. *Archphantes* sp. T, H, K

岩水寺洞を除く3洞穴では最も個体数の多い種類で、洞壁の凹地、洞床の岩石の間などに多く、シート状の皿網をはつている。網は10cm程度ものから、15cm近くになるものも見られる。

色彩、斑紋等は個体差があり、一見して他種とは区別し難いが、よく成熟した♂では、頭部、歩脚腿節の赤褐色が強い。

♀は外雌器に太く大型のscapeをもち、♂ではpalpの膝節に1本のつの状突起をもち先端に剛毛を生ずる。

洞口付近の暗所から洞の最深部にまで広くみられるが、未だ野外では採集されていない。野外では、やや小型で歩脚の長い別種が、天竜市等で採集されている。

10. *Conoculus lyugadinus* Komatsu ヨリメグモ G

本種は野外でも直射日光のささないけい流の水辺にて採集されるが、洞内でも池の部分にて採集した

KISHIDAIA, Nos. 26~28, 1971, Nov.

11. *Cybaeus nipponicus* (Uyemura) カチドキナミハグモ G, K

12. *Cybaeus* sp. G, T

*C. nipponicus*が主として洞口付近で、採集されるのに対して、本種は洞内の暗所のみ生息する。*C. nipponicus*よりやや小型で白色である。住居はナミハグモ特有のV字状住居を作る。個体数はあまり多くないが、10月頃成体が見られる。

13. *Coelotes* sp. G, K

幼生が採集されているのみである。

14. *Cicurina* sp. K

洞口付近の石下より♀2、♂1を採集した。全体灰白色で腹部に灰色の斑紋をもつ。

15. *Pirata* sp. K

1971.9.26 洞口付近で幼生1個体採集。

16. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ T, H, K

この他に、上記の目録以外に数種採集されているが、いずれも幼生で採集個体数も1個体のみであるため省略した。ただ滝沢洞穴で採集されたものは全体白色で洞穴性であると思われる。

11科16種の各洞における種類数は、滝沢洞穴8種、岩水寺洞穴6種、堀谷洞穴7種、小堀谷洞穴8種となり洞穴毎の差は少ない。又それぞれの洞穴における種の分布は表1のようである。野外においても生息するウズグモ、コホラヒメグモ、コアシダカグモのような好洞穴種は広く各洞にて採集される。又科別にみると11科のうち1科で2種、同じ洞穴で採集されている科はマシラグモ科、ミズグモ科、タナグモ科の3科のみで、他の8科は1科1種である。又2種採集されている科のもので岩水寺洞の*Cybaeus nipponicus*と*C. sp.*のように洞口付近と洞内暗所というように、生息場所に差が認められる。一般に洞穴のように、物理的、生物的に比較的単純で安定した環境下にあつては、生息するクモ類は限られ、同じ生態的地位を占める2種の生息は困難であることより、1つの洞穴における、科毎あるいは、属毎の種類数は限られてくると思われる。

以上がこれまでの調査結果であるが、今後さらに詳細な調査により完全なものとなしたい。なお富士山周辺にある多数の風穴のクモ類については、八木沼健夫博士により研究されているが、これが明らかになれば本県の洞穴性蜘蛛も大幅に追加されるものと思われる。

Table 1. Locality cave of cavespiders in Sizuoka prefecture.

Species	Cave	G	T	H	K*
<i>Antrodiaetus roretzi</i>		○		○	
<i>Latys punctosparsa</i>				○	
<i>Uloborus varians</i>		○	○	○	○
<i>Falcileptoneta striata</i>				○	
F. sp.		○			
<i>Theridion tepidariorum</i>				○	
<i>Nesticus brevipes</i>		○	○		○
<i>Archantes tamaensis</i>			○		
A. p.			○	○	○

Species	Cave	G	T	H	K*
Coroculus iyugadinus		○			
Cybaeus nipponicus		○			○
C. sp.		○	○		
Coelotes sp.		○			○
Cicurina sp.					○
Pirata sp.					○
Heteropoda forcipata			○	○	○
Total		8	6	7	8

* G.....Gansuiji cave
T.....Takisawa cave
H.....Horiya cave
K.....Koboriya cave

参 考 文 献

- 小松 敏宏: 1940 龍河洞産蜘蛛5種に就いて、Acta. Arach. Vol V, №3
Komatsu, T. 1970 A new genus and a new species of Japanese
spiders (Falcileploneta n.g. and Sarutana
kawasawai n.sp. Leptonetidae) Acta. Arach.
Vol. XXIII. №1
- 大井 良次 1957 仏通寺蜘蛛3種及び1新種、Acta. Arac Vol. XIV, №2
Oi, R. 1960 Linyphiid spiders of Japan.
Jour. Inst. Polyt. Osaka
City Univ. D, Vol. 11
- 八木 沼健夫 1962 洞穴産のクモ、大坂市立自然科学博物館葉積第175号
Yaginuma, T. 1970 The New species of Small nesticid spiders
of Japan. Bull. Nat. Sci. Mus.
Vol. 13 №3
- 1970: The spider fauna of Japan.
Bull. Nat. Sci. Mus.
Vol. 13 №4

ハナグモの人工飼育

石山 鉄 幸

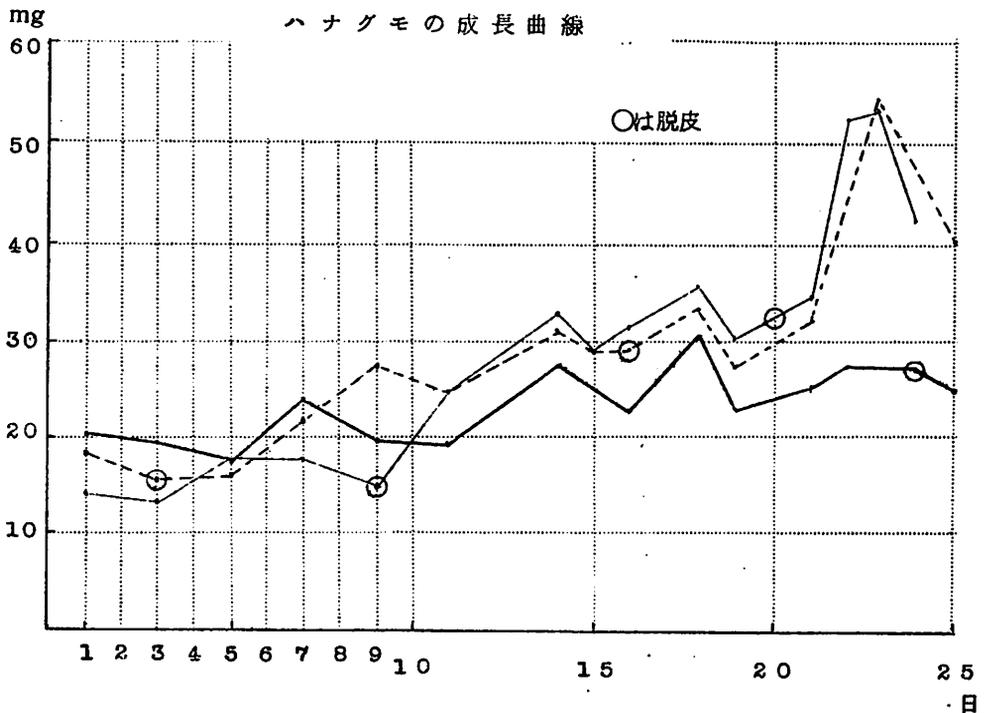
真性クモ類の人工飼育は、クモが生きた昆虫しか食べないとされていた点、クモ独特の体外消化をする点、ともぐいをする点、etc. など大変むずかしいとされてきていた。

日本では萱嶋泉先生、福島正三先生などにより、ハナグモ、ササグモの飼育が生きたシヨウジョウバエをコップの中に繁殖させ、それによつて飼育してきた。またアメリカでは、ハエなどのしほり液を湿度を落して、クモに水分といつしよに与えてうまく行つたようであるが、やはり成長ばかり遅いようである。

筆者は、冷凍保存してあるミツバチのオスの幼虫、蛹をハナグモに与えて見た所、良く食べてくれて、うまく成長してくれている。まだ途中であるが、現在までシャーレの中で2~3回脱皮している。

まだ、初めばかりなので、まだまだ問題点が多い。しかし、ともぐいをふせぐ点では、アメリカでクサカゲロウを飼育するのに、布の上に紙で小さな室を作り、その中に1個体ずつを入れて、えさなどを与える場合は、下から二酸化炭素で麻醉して行なつている。この方法でかなりの量の万単位の人口飼育に成功している。この方法をクモも利用できる様に思われる。

筆者が行なつた方法は、ハナグモ *Misumenops tricuspidatus* (FABRICIUS, 1775) の体長3~4mm 前後、体重15~20mg 前後のものを野外より採集してきて行なつた。温度は25℃ 湿度60~70%で行なつた。えさは毎日とりかえた。グラフは25日間のハナグモの体重からみた成長曲線である。夏休みに入つてしまつたのでデータが中途半端になつてしまつたが、ジグザクに成長していく、成長の仕方がわかり頂けると幸いです。



コガネグモとオニグモの教え

九毛音子

◎所は四国高松の鬼無町^{キナン}の盆栽作りの名人天雲晴吉さんの庭。

◎時は真夏の昼さがり。

◎人物は天雲晴吉さんと長男の高校3年の晴夫君。

◎此處で語られる民話が「コガネグモとオニグモの教え」である。

晴夫「お父さん、このきれいなクモは何んと言うの」

晴吉「それはね、先日泊つてこの辺りのクモを研究して帰られた先生の話だとコガネグモと言うクモだそうだ」

晴夫「コガネグモと言うの、ふーん、よくこのクモにあたっているね。その名は、ほんとうに網もきれいだ。うちの庭には全く多いな、ほらあそこにも、あれあんな所にもいるよ」

晴吉「さつきお父さんも多いのに驚いて数えたのだよ。45匹までは数えたがまだまだいるよ、先生の話して益をする動物と言うことだから大切に飼つてやろうな晴夫」

晴夫「ふーん、僕は今までにだいが殺したからなー」

晴吉「お父さんだつてさ、盆栽の手入をするときにじやまになるから、どんどん網をこわしこのクモを殺したものだよ」

晴夫「お父さん、でも夜出てくるあの大きい網をはる 気味の悪い真黒なクモは殺してもよいのでしよう」

晴吉「いやいや、あれはオニグモと云つて、やっぱり我々のためになる大切なクモであるそうだ」

晴夫「へーえ、驚いたね。どこがためになるのかしら」

晴吉「あれは昼は軒にかくれていて夕方に丸網を張るクモで、網が丈夫であるから、かなり大きな昆虫が夜間にどしどしかかるそうで。夜間私共が知らない間に多数の害虫を食べていてくれるので誠にありがたいクモだそうだ。先生はクモは全部益をすると言つたよ」

晴夫「なるほど、コガネグモは昼間、オニグモは夜間に働くのか。なかなかクモも面白いね」

晴吉「この間の先生もそう言つていたね。なんでも40年間も研究しているが、しらべればしらべる程、面白い習性がわかつて、ほんとうにクモと言うものは人間と密接な関係のある動物であることがわかんと言つておられた。晴夫お前もクモを研究してみないか」

晴夫「お父さん、まいつたな、僕はこの前にも言つたようにこの盆栽を研究してお父さんのように盆栽作りの名人と言われるような人になりたいのだ」

晴吉「お父さんの言うのは、盆栽を研究しながらクモもやつてみたらと言うことなんだよ」

晴夫「しかし今は盆栽しか頭にないんだ。お父さんの御蔭で日本の盆栽の町鬼無町となつた。それを僕は世界の盆栽の町鬼無町にしたいからな。盆栽、盆栽で頭は一杯です」

晴吉「お前仲々よいこと言うね。高校三年生は子供だと思つていたが、お前の考えは立派な大人の考えで、おいつかりたのむよ。時にね、今日はお前に聞いてもらいたい話があるんだ。クモの先生と、お父さんが約束したことについてなんだ。それはね、お父さんが、鬼無町のいわれについて先生に話をしたの、あの例の桃太郎の鬼征伐の話だよ。するとね、先生が、しきりに考えこむのだね。それはコガネグモとオニグモの名の由来と似ていると言うんだよ。そうしてこの地方でコガネグモとオニグモについて多くの人々に桃太郎と鬼と云う関係で、コガネグモとオニグモを考えてくれないかと頼んでくれと言われるのだ。この辺の人はクモについて少しも感心ないからたとえ頼んでも駄目と思

KISHIDAIA, Nos. 26~28, 1971, Nov.

うので、お父さんが、一生懸命に考えてみたことを、お前に聞いてもらいたいのだ。余りおかしく、とんちんかんのことなら先生には知らせないつもりだ。先生は何にかコガネグモとオニグモについて名のおこりを知っているよりだが、鬼と桃太郎のことなら、ここが本場だからな、晴夫よく聞けよ。伝説とか、民話などと言うものは、皆人が作ったものさ、このお父さんの作り話が広まれば、鬼無町の伝説と名所が一つ増えることになるぞ、耳の孔をほじつてよく聞くのだぞ。お父さんも忘れないうちに書いておくつもりだ。」

晴夫「なーんだ、今日は変んな日だ、一寸このクモをほめたばかりに、お父さんの作り話を聞くはめになつてしまった」

桃太郎は鬼を征伐したので、鬼のいなくなつたこの地方を鬼無の里と名づけた。それで平和な日がこの里にもおとずれたのである。それから15年たつた或る日、降参した鬼が、どうしているかと桃太郎は鬼を逃がしてやつた大平山を尋ねてみた。この山は497mの低い山であるが、楠や椎の木がうつそうと繁茂している。森の中の小路を2時間余り歩いて、やつと鬼たちの部落のある赤子谷に到着した。彼等は何時その部落のはずれに、見張りを立てているらしく、桃太郎が赤子谷についた時には、鬼の大将ウイル・ベンスキーは自分の家の前で、にこにこして桃太郎を迎えた。桃太郎は家の中を見て驚いた。すつかり日本式になつていて、以前桃太郎に誓つたように、真面目に働いている様子が一目でわかつた。

ベンスキー「お久しぶりです。あの節は大変御迷惑をかけました。我々も日本にシベリヤから逃れて来て間がなかつたので、随分悪いこともしました。そうでないと生活が出来なかつたのです。けれども次第に日本と云うものがわかつてくると、風貌の異なる私達を鬼と言つてこわがるのが、理解できたのです。そうして日のたつにつれて日本人の人情と云うものに心を打たれるようになりました。我々スラブ系の人間が日本人よりすぐれていると思つていましたが、そのようなことは少しもありません。全く同じです。もう私達30人は本國に帰る気持はありません。この土地で日本人として生活したいのです。あなたのような立派な日本人に巡り合つたことは、全く幸でありました。あなたが、この地の横の人々に私共のことをよく話して頂いた御蔭で、私共がここに逃げこんだ時、少しも気持を悪く思つて、我々を嫌う人がいなかつたので助かつたのです。御覧のように地元の人と私共毛色の異なる30人とは、今では全くとけあつて生活が出来ようになりました。私共はあなたに征伐されたのではなく、救われたのです。あゝすつかり自分だけでしゃべつてしまつた。桃太郎さん今日は何んの御用で当地にこられたのですか」

桃太郎「用と言う用はないのです。只あなた方がその後どのように暮らして居られるかが、気にかかつたので、様子を拝見にきました」

ベンスキー「ありがたい。一度こちらから御礼に行かねばならないのに、全く済みません。御許し下さい。とにかく現在では毎日が楽しく、また忙しいのです。私も味噌汁と漬物の味がわかるようになりましたし、着物が身につけてきました」

桃太郎「なるほど、立派な日本人ですな一、土地の人とはどのようは仕事をしていますか。」

ベンスキー「力仕事は私共が引きうけます。小細工や考えごとは土地の人にしてもらい、これがとてもうまくいつているのです」

桃太郎「それは面白いですね。あなたが元はモスクワ公園の要人で、勇敢なる軍人と聞いてましたが、知恵を地元人である日本人にまかせるのは愉快ですね」

ベンスキー「いやいやビイター大帝に追れてシベリヤに10年近く流されている間にすつかり頭も馬鹿になりました。日本人は頭のよい国民ですね」

桃太郎「私も安心しました。日本も今は源氏と平家とが互に争つていて、おちつきがありません。やがて平和になつたらあなたたちの帰国について真剣に考えてあげたいと思います」

ベンスキー「いや、帰国なんてことはすつかりあきらめました。その気持は全くありません。次の話を地元の人々から聞いて、ほんとうの日本人になりたいと思ひようになり、唯今ではもう日本人のつもりです」

桃太郎「ではその話と言うのはどんな話ですか」

ベンスキー「太平山の森にはコガネグモとオニグモがとても多く生息しています。8月になると、どちらもすばらしく美しい円形の大きな網を張り、あたかもお互に勢力の争をしているかのようです。しかしよく観察してみると、けしてお互に戦争はしていません。自身の持つている特徴を上手に活かして、お互いのびのびと生活している。コガネグモは美しい体色を持つていて、体も大きく、王様のようです。その網も大きく、その糸も張りたては銀白色であるが、次第に黄金に輝いてくるので美しさは次第に増してくる。このコガネグモは実に柔和で、決して争うことはしない。強い者に出会うと、全く自然に弱い者が逃げる。そうして頭がよい、だからオニグモと共に生活をするとき、虫の多く飛びかう場所をオニグモよりも先きに占領してしまふ。だから生長の速さがコガネグモの方が速いのだね。盛んに食べて、大いに発育し、さつさと卵を産んで、一足先に親は死んでゆく。その点オニグモはあらゆる面でもたもたしている。性質は全く荒つぽい。そうしてあわてものである。それにいけないのはしよつちゆう昼寝をしている。これにはわけがあるらしい。なんといつてもコガネグモが余りにきれいなので、屋太陽の光のもとで、人々に比較されるのが全くつらいことであるらしい。したがつて網に出る時刻を暗い夜にづらしたと言うのである。夕方つそりと出てくるともうよい場所はコガネグモにとられていて、つい高い所に網を張らねばならない。これは大変なことで、足場がとて悪くなるし、遠くなる。それで糸も無駄が多くなるのだね。風のあるときは、さほど苦労はしないが、夕風にあると全く平降する。最初に出す幾千本と云うためし糸がさつぱり言うことをきかない。しかたないからひもじい腹をかかえて風の出るのを待つことになる。このようにやつと張つた時の網は、全くありがたく感じる。張り終えて網の真中を食いきり、穴をあけて、8本の足でぎゅつと網を縮めて、下を向いて占座した時ほどうれいしいものはない。オニグモは体の色が黒く、毛むくじやらであるから鬼グモと名付けられた言うのはあたつている。けれども当のオニグモにしてみれば、やりきれない。なんとかして別の名をつくように自分を反省せねばとオニグモ同志は何べんか話し合つたそうだ。そうしてオニグモと云う名のついている間は人目になるべくふれぬように現在のよな生きかたをした方がよいとも話し合つたとか、桃太郎さん、地元の人々にこの話を聞いた時、私共ははつとしました。ほんとうに私共はオニグモのよなもので、地元の人達はコガネグモのよな人であると感じたのです。コガネグモはけつしてオニグモを追い出そうとはしないし、戦いをいどんでこない。むしろ私達が私達なりに生活出来るようにしてくれる。私共はこの温い地元の人達とあくまでも姿が違ふ。しかし、こちらが自分をわきまえて生活すれば、決してトラブルは起らない。このように私達を理解してくれる人々が外にあるであろうか。自国のロシヤでさえ私共を逐放したではないか。自国に帰れば殺されるまでである。私共から鬼と云う名のとれるまで、私共は、静かに、正直に、真面目に働く外はありません。それもオニグモのように目立たぬように生活せねばなりません。私はそれがこのコガネグモとオニグモの知恵と云う地元民の話によつて理解出来ました。桃太郎さん、御心配入りませんよ。私共はもう立派な日本人です。もう立派な赤子谷の住人ですよ。私を初め30人全部が家庭を持ちました。これは大変なことでした。それは地元の人々が、ほんとうに私共を理解してくれたからです。コガネグモもオニグモも同じクモであることは間違いないことが私共にわかつたからです。桃太郎さんほんとうにありがとうございました」

KISHIDAIA, Nos. 26~28, 1971, Nov.

桃太郎「クモが鬼の魂をめざますとはい全く不思議なことだ。そのコガネクモとオニクモの話を作つた地元民の自然に対する観察力のするどさにも敬服する。あゝ僕もこのクモの話をじっくり味つてこれからの暮しに役立てたいものだ」
(完)

クモの記事 (5)

小野展嗣

四 国 の 生 物
石 原 保 著
昭和33年10月25日 初版発行
北 隆 館 135頁 ¥200

昆虫学者である著者の観察記録で、折にふれて綴られた動植物の生態に興味深く書かれており面白い「生物記」である。クモはほとんど出てこないが、飼育中のヤマガラがアシダカグモやハエトリグモ類を好んで食べることが記されている。

生物記 その不思議な生活
万 足 卓 訳編
昭和38年 6月30日 初版発行
社会思想社 262頁 ¥180

本書は訳者のあとがきによると“Die Wunder der Natur” (1912)の中から比較的身近かっている生物に関する章を選んで編んだものである。クモの項の著者はエルンスト・アプト。10頁にわたつて写真7枚と共にクモ一般の形態的な解説がなされている。

が、肝心の学術用語の訳が適当でないので読むときは注意を要する。訳者はドイツ語の学者でこちらの方は素人で原稿を専門家に検討してもらつた由だが、こういう種の本を出すときには慎重を期してほしいものである。本書の内容は大河内哲二氏がクモの記事(2)で紹介されているドイツ語対訳本「虫の不思議」と同じようである。

英 文 学 動 物 ば な し
加 藤 燾 市 著
昭和39年 6月25日 初版発行
松 柏 社 278頁 ¥500

本書はイギリス文学における動物伝承や俗説俚諺のたぐいを取り上げたもので、クモに関する話が4頁ほど出てくる。有名なブルース王とクモの話や舞踏病(tarantism)のことなどが扱われている。イギリスでは一般に“*If you wish to live and*

thrive, let a spider run alive.” と言つてクモを殺すのをひかえるそうである。

原色ミクロの世界
浅野 明 著
昭和41年 4月30日 第1刷発行
講談社ブルーバックス

142頁 ￥280

本書は兎事を顕微鏡写真集である。中に「クモの出糸突起」と題する白黒写真がある。また巻末の顕微鏡写真の簡単な写し方の説明は参考になる。

小 観 察 あ れ こ れ

高 野 伸 二

◎ユカタヤマシログモの子ぐもの数

昭和46年5月4日、渋谷の勤め先の室でユカタヤマシログモを発見、自宅に持ち帰って飼育したところ、5月25日夜産卵し、卵のうを口器につけていた。この卵は以後えさをとらず、6月16日に子ぐもが出産した。子ぐもの数30びき。親はその日に小形ヒメグモ幼生をたべ、19日夜、小さなガをあたえたところ、それも食べていたが、20日朝どうしたことが死亡していた。子ぐもは25日に分散した。

新海さんに伺つたらユタカヤマシログモの卵数は大体30こ前後とのこと。

◎カノコガとクモ

昭和46年7月8日、千葉県上総一の宮でコガネグモを観察中、近くにいたカノコガをあみにかけてやつた。コガネグモはすばやくえもの所まで来たので、例によつてすぐに巾広い糸の帯を出してまくかと思つたら、第一歩脚でカノコガにさわり、二三度ためすように動かしたと思つたら、まわりの糸を切り、カノコガをおとして、占座点へもどつた。カノコガはコガネグモの口に合わないのだろうか。どのコガネグモもそうするのか。このコガネグモはそのすぐ後にかけてやつたドウガネブイブイにはすばやく糸をまいて、すぐに吸引をはじめたから、満腹であつたわけではない。ガの中にはあまりおいしくないというより食べるとよろしくないものもいるらしく、クモではないが、アカモズという鳥の幼鳥にトンボエダシヤクをあたえたら死んだという記録がある。私も飼育中のイオウイロハシリグモにユウマダラエダシヤクをあたえても、たべなかつたことがあり、またスジグロシロチヨウのおすをあたえたら、ぱつと飛びついてくわえたが、反射的にはなし、その時、例の沈丁華の花のにおいに似た強い香りがただよつた。スジグロシロチヨウのおすは我々がつかまえてもこのにおいを発するが、身を守るのに役立つのかも知れない。カノコガがコガネグモにいやがられるかどうかは来年注意してためしてみたいが、このガはふしぎにササグモのえじきになることが多い。「カノコガをとらえたササグモ」の写真は「大図鑑」にもついているし、その他でも何回か見た。コガネグモのきらいなカノコガをとくにササグモが好むわけでもあるまいが。

◎オオトリノフンダマシの出産

石沢慈鳥さんの「日本昆虫生態図鑑」にはオオトリノフンダマシの写真があり(ただし、トリノフンダマシとなつている)、子ぐもは卵のう内で冬をこして翌年5月頃分散すると書いてあるので、八

KISHIDAIA, Nos. 26~28, 1971, Nov.

王子市外から持つて来たオオトリノフンダマンの卵のうを庭の垣根に枝ごとゆわえつけておいた。ところが10月6日午前7時半頃、その卵のうに直径1mmにも足りないあながあいて、そこから子ぐもが出始めているのに気づいた。1びき1びき、次々とあなから出て来て、親が卵のうを作る時にかけた糸を伝い、あとから出て来たものは、前の子ぐもの糸を伝つて、次第に分散し、午前10時までには全部で254ひきの子ぐもが出た。最初の子ぐもが出て1時間後には蛛疣から出した糸につて飛んでいくものもいたことから見ると、オオトリノフンダマンの子ぐもは、コガネグモのように、数日間まどいをするということはないのではなからうか。この卵のうは9月13日に持つて来たものである。なお10月9日、滝山附近で見つけたオオトリノフンダマンの卵のう9この中、子ぐもが出てしまつたものは2こで、残りの7こはまだあながあいていなかつた。果して、どの卵のうも年内に子ぐもが出るのか、それとも卵のう内越冬の場合もあるのか。

◎ゲホウグモの記録

ゲホウグモは図鑑でみると、何だかダニを大きくしたような形であまりすてきなクモとは言えないように思つていた。昭和46年10月9日、八王子外の滝山城跡近くの雑木林の林縁のクヌギの枯れ枝から糸をひいて下がつている小さいクモを見つけた。よくみると腹背がとんがつている。今まで見たことがない種類だと思ひ、かんびんにいれてみると、どうもゲホウグモらしい。しかし大図鑑に出ているのとはちがつて、腹背の前線が大きなとげのようになつていゝもので、なかなか愛嬌がある。例の「Australian spiders in Colour」には同じPoltyes属のクモの写真がのつていゝが、腹部のとんがつた形である。この属のクモは生きていゝ木にはいゝないで、枯れた枝にいて、足を体につけ、日中はじつと枝にとまつていゝと説明に書いてあつた。このゲホウグモも枯れ枝の上を歩かせると、すぐに足をちぢめてじつとしてしまひ、そうなるど枝の突起のように見えて発見しにくい。ゲホウグモは東京では島部を除いてははじめての記録であるといゝ。

◎欠陥グモ

昭和46年9月17日に山梨県の笹坂峠でとつて来たイシザワオニグモ(体長約8mm)を庭に放したがどこかへ行つてしまつた。ところが10月15日にこのクモが庭のトキワサンザシの葉のしげみにかくれがを定め、円網を張つていゝのをみつけた。夜8時20分に、新しく網をはりおえたので、植木鉢の下からダンゴムシを1びきとつて、占座点の下方にかけた。クモはまず網を第一歩脚で2、3回ひつばつてから、えものに近づきぐるぐると糸をまいたが、いざそのえものをまわりの網から切りはなそうとするが、自分の左側の第三歩脚が粘糸にくつついてどうしてもはなれない。もたもたしていゝうちにダンゴムシはいちだん下におち、別の場所の粘糸にかかつたが、結局クモはなかなか糸からはなれられず、ダンゴムシは下へおちてしまつた。翌朝、シマハナアブを同じ網にかけてやつたところ、えものの所へ来て糸をかけようとするがねらいがちがつてアブにはかからず、アブは下へおちたので、すぐにひろつてもう一度網にかけてやつたとたん、クモ自身が地上にぽんとおちてしまつた。その落ち方は、全く石でもおちるようで、糸を引いておちたようには思われなかつたので、あみとクモの間をよく調べたが、たしかに糸はなかつた。自分のあみがわれたからといつて、糸もひかずにほりり出されるクモなんて、はじめて見た。このイシザワオニグモは、この時期にまだ小さいので、発育のおくれたものかも知れないし、1カ月近くもあるいはえさもたべていゝのかも知れない。ともかく、私が始めてみる欠陥グモであつた。

◎オニグモ、網をゆする

昭和46年10月16日、自宅附近のコンクリートのへいの垂直面にそつて円網があり、コンクリートのすき間から歩脚を出して待機していゝクモがいたので、その足をコンクリートのかべにちよつとおさえつけてやつた。すき間ににげこむかと思つたのに反して、あわてたようすで糸を伝つて、円網

の占座点に出て来たのは、体長約1 cmのオニグモの幼生であつたが、占座点についてすぐ、このクモは体をまわすように動かして、ほんの短時間ではあつたが網をゆすつた。

エキスパートにとっては珍しいことではないのかも知れないが、私ははじめて見た。

標 本 交 換

ハエトリグモの標本を下さい

ハエトリグモ科の標本(成体)ならば、何でも結構です。

供出標本は、ハエトリグモ科以外の手持ちのものならば、何でもかまいません。

主な産地は千葉県及び東京都下高尾山です。

御一報下さい。

松 本 誠 治

山 形 市 の ク モ

吉 田 哉

これまでとくに山形市においてクモ類の採集をおこなつてきましたが、ここにそれを発表します。全部で15科47種です。私の注意力が足りないのか、まだこれしか採集ができておりません。これからも一層山野をかけめぐり山形市のクモ相を調査してゆきたいと思つております。

なお、同定・文献・その他でお世話になつている追手門学院大学教授八木沼健夫先生に紙上を借りてお礼を申し上げます。

採集地略称 千歳山...C 新山...N 上宝沢...Ka 山寺...Y 門伝...Mo 前明石...M.
旧市内...K ほとんどどこでも見られたものは何もつけない。

目 録

ATYPIDAE	ジグモ科	
1. <i>Atypus karschi</i> Doenitz	ジグモ	K
ULOBORIDAE	ウズグモ科	
2. <i>Uloborus tokyoensis</i> Kishida	トウキヨウウズグモ	K
3. V. Boes. et Str.	ウズグモ	C
SCYTODIDAE	ヤマシログモ科	

KISHIDAIA, No. 26~28, 1971, Nov.

4.	<i>Scytodes thoracica</i> (Latreille)	ユカタヤマシログモ	K
	THERIDIIDAE	ヒメグモ科	
5.	<i>Enoplognatha transversifoveata</i> (Boes. et Str.)	カレヒメグモ	
6.	<i>Theridion tepidariorum</i> (C. Koch)	オオヒメグモ	
	LINYPHIIDAE	サラグモ科	
7.	<i>Linyphia oidedicata</i> (Helsdingen)	ヘリジロサラグモ	M
8.	<i>Prolinyphia longipedia</i> (Boes. et Str.)	アシナガサラグモ	C
	MIMETIDAE	センシウグモ科	
9.	<i>Ero japonica</i> Boes. et Str.	センシウグモ	K
	ARGIOPIDAE	コガネグモ科	
10.	<i>Acusilas coccineus</i> Simon	ハツリグモ	O
11.	<i>Araneus ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ	
12.	<i>A. cornutus</i> Clerck	ナカムラオニグモ	N
13.	<i>A. displicatus</i> Hentz	ムツボシオニグモ	C
14.	<i>A. ejusmodi</i> Boes. et Str.	ヌサオニグモ	K
15.	<i>Neoscona doenitzi</i> (Boes. et Str.)	ドヨウオニグモ	N
16.	<i>N. nautica</i> (L. Koch)	イエオニグモ	K
17.	<i>N. scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ	N
18.	<i>Yaginomia sia</i> (Strand)	ズグロオニグモ	K
19.	<i>Argiope bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ	M
20.	<i>Meta segmentata</i> (Clerck)	キタドヨウグモ	C
21.	<i>Nephila clavata</i> L. Koch	ジヨウグモ	
	TETRAGNATHIDAE	アシナガグモ科	
22.	<i>Leucauge magnifica</i> Yaginuma	オオシロカネグモ	K
23.	<i>Tetragnatha praedonia</i> L. Koch	アシナガグモ	N
24.	<i>T. squamata</i> Karsch	ウロコアシナガグモ	K
	UROCTEIDAE	ヒラタグモ科	
25.	<i>Uroctea compactilis</i> L. Koch	ヒラタグモ	K
	AGELENIDAE	タナグモ科	
26.	<i>Agelena opulenta</i> L. Koch	コクサグモ	
27.	<i>Coelotes insidiosus</i> L. Koch	シモフリイオグモ	OK
	PISAURIDAE	キシダグモ科	
28.	<i>Dolomedes raptor</i> Boes. et Str.	アオグロハシリグモ	Ka
29.	<i>D. sulfureus</i> L. Koch	イオウイロハシリグモ	M
	LYCOSIDAE	ドクグモ科	
30.	<i>Lycosa pseudoannulata</i> (Boes. et Str.)	キクツキドクグモ	
31.	<i>Pardosa T-insignita</i> (Boes. et Str.)	ウズキドクグモ	
32.	<i>Trochosa terricola</i> (Thorell)	カラフトドクグモ	K
	THOMISIDAE	カニグモ科	
33.	<i>Misumenops tricuspidatus</i> (Fabricius)	ハナグモ	
34.	<i>Oxytate striatipes</i> L. Koch	ワカバグモ	O

そうに思える。ときどき、アリとか、カメハシの話も入って、談話にサビをきかした。そんな時、大河内さんは管ピンをとり出して、虫屋の友人への土産として採集したカモドキサシガメを披露してくれた。めずらしいクモの話はさらにつづいた。やがて貴重なクモの名前が後を追った。

ワクトツキジグモ、ムツトガイセキ、マメタイセキ、唯からともなく、ベスト10の選択に入ろうとの提案から、妙な緊張が始まった。ちなみに蝶のように価格をつけるとすれば、ワクトツキジグモは、以前、萱渦先生が1億円でも渡せないということから、第1位だった。ベストテン審査はさらにつづいた。

カトウツケオグモ、サカグチトリノフンダマシ、ツシマトリノフンダマシ、キジロオヒキグモ……。そのうえ雄はすべて2倍の価値ということになった。もう一方、別格としてキムラグモ、ミズグモが特別賞に輝いた。こうして話はずきなかつた。

8月17日、埼玉県秩父での東京クモ談話会、強化合宿観察会の夜であった。

談話会も満5周年を記念して、KISHIDAIAの記念号を発行するという。足手まといの会員だが、せめて何かお手伝いできるならばと思ひ。表紙図案をあつかましくお引き受けしたのである。大番主義の表紙をつくる気持はないが、合宿での談話にてた、クモたちをもとに、八木沼先生の図鑑から写し、並べてみたのである。表紙文字は、従来のKISHIDAIAのように、ローマン体だが、Geoffroy Tory(フランス1480~1533)の作図した文字を引用した。岸田先生にゆかりの、ヨツボシワグモは、ベストテン入りしなかつたものの、しかしやつぱり、クモの中でも、本当にクモらしい。子供の頃からなじんでいるクモの姿だ。腹部の4つの星にロマンを背負つたしかも精悍な姿は、どれよりもやつぱり中心に位置したくなる。KISHIDAIA万才。そうして、この会誌が、クモ学会の良き協力者であることを忘れてはなるまい。

会 員 名 簿 (追 加)

石野田 辰夫	880-03	宮崎県宮崎郡佐土原町西佐土原上新町
小松 敏宏	392	長野県諏訪市末広5-18
西川 喜朗	546	大阪府吹田市山田下2830-14
須賀 英文	466	愛知県名古屋市昭和区元宮町6-17
高田 勝	215	神奈川県川崎市万福寺514ゆりハイツ 11号
高橋 登	210	神奈川県川崎市観音1-137
千国 安之輔	399-82	長野県南安曇郡豊科町4810
築地 満男	889-43	宮崎県西諸県郡えびの町中原教職員住宅

住 所 変 更

近藤 昭文	神奈川県横浜市磯子区洋光台2丁目1-19-304
田中 穂積	大阪府堺市少林寺町東3丁目少林寺団地二棟52号

KISHIDAIA Nos. 26~28

1971年11月25日 印刷

1971年11月26日 発行

編集者 大河内 哲 二

発行者 董 嶋 泉

東京蜘蛛談話会

発行所 〒191 東京都日野市豊田1896 董嶋 泉方

PHONE 0425 (81) 7128

印刷所 埼玉県身体障害者更生指導所タイプ孔版科
